町長コラム

町長室からこんにちは No.15

一宮町長
馬淵 昌也

一宮町の課題のひとつに、文化関係施設の充実ということがあります。一宮町は、近隣市町村に比べると、文化関係の施設が貧弱です。たとえば、睦沢町には郷土資料館があり、広大な運動公園があります。長生村には文化会館があり、音楽ホールとともに図書館もあります。それに比すると、一宮町の状況は残念なものです。こうした文化活動の拠点となる施設の充実が、町が取り組むべき課題として目の前に立ちはだかっています。

ところで、こうした状況はどうして出てきたのでしょうか。実は、一宮町は、都市的発展は近隣に比べて早く、江戸期以降活発な経済・文化活動が展開されてきました。明治以降も、名うての別荘地として、貴顕の士が集った場所です。文化財の残存状態は、近隣に比べて圧倒的に多いそうです。だとすると、一宮地域がもともと持っていた文化活動に対する目線の高さに比して、現在の文化施設の貧弱な状況が不可解な落差に感じられます。

そこで、最近思いついたことがあります。過去の一宮には、大きな勢力家が何軒もあり、各家の当主が名士を集めて私邸で文化活動を展開していたと伺っています。その、私的な回路での文化活動が盛んであったため、かえって行政による文化活動振興が必要だとは自覚されなかったのではないか、ということです。

一宮から東浪見にかけて、町中・農村部を問わず、名家に多くの人々が訪れ、詩酒の会などを開いていたそうです。今でもそうした応酬の名残が各家に文化財として残されています。

こうした名家の文化活動は、戦後になると下火になってゆきました。ただ、そうした名家を中心とする民間での活動の記憶が鮮明なだけ、行政による文化活動サポートが、文化振興に不可欠だという認識が、逆に生まれにくくなったのではないかと思うのです。

もちろん、「過去の一宮町においては、政争が激しく、政権交代のたびにそれまでの政策が反故になってきた。それで、様々な施設などの建設が他の市町村よりも遅れてしまったのだ」というようなことも、しばしば指摘されています。しかし、わたくしの私見では、上に述べたような逆説的要因も関わっていたのではないかと思います。

いずれにせよ、現状の一宮町に文化関係の施設の充実や文化活動に対するサポートが必要不可欠であることは間違いありません。過去に活発な文化活動が行われていたという歴史があればこそ、それに恥じないように、今後、文化活動の振興のために力を注いでゆこうと思っています。